

# 留学生の書く日本語意見文の分析

## 日本人学生との比較において

Lee 凧子

### はじめに

「少子化」、「国際化」、「グローバル化」という言葉が日常的に用いられる現在、日本の大学では、以前にもまして留学生の存在が、その重要性が認識されはじめている。文部科学省の統計によると、日本の大学・大学院・専修学校に在籍する留学生の数は2003年5月時点で109,508（前年度比14.6%増）、2004年5月時点では117,302（前年度比7.1%増）となっている。

このように、年々増加しつつある留学生に対して大学はどのようなアカデミック・サポートをほどこすべきなのだろうか。立命館大学では、留学生の日本語のニーズにこたえるべく、学部に入學してきた1回生留学生を対象に、「文法・文章表現」、「読解・語彙」、「聴解・口頭表現」の三科目を必修科目とし、前期、後期あわせて6単位の取得を課している。これを修了した2回生に対しては、さらに高レベルの日本語科目から2単位の取得を課し、卒業時点までに計8単位の取得が求められている。留学生はこれらの科目を履修することによって日本人学生との言語能力差を埋めることが期待されているのであるが、実際、1回生時でどの程度の言語能力差が留学生と日本人学生との間に存在するのかについては立命館大学内で検証されることがなかった。

本稿は、以上のような状況の下で行われた調査研究を報告するものである。今回は言語能力の中でも「書くこと」に焦点を当てた。大学では、筆記試験やレポート等、「書くこと」で評価されることが多いということ、毎学期行われている授業アンケート項目にある回答でも「日本語の中で

書くことがもっとも難しいと思う」と答える留学生の割合がもっとも高いということが、その主な理由である。

## 1. 調査方法

留学生と日本人学生との比較を行うため、立命館大学の同一学年に在籍する学生を対象として、作文を書かせることにした。その詳細は以下の通りである。

対象者：立命館大学びわこ・くさつキャンパス、学部1回生時に在籍する留学生58名、日本人学生36名。留学生の内訳は中国語母語話者46名、韓国語母語話者11名、その他が1名であり、日本語能力としては、大半が日本語能力試験1級を合格している上級レベルである。

収集時期：留学生については2002年11月、日本人学生については2003年5月に行った。日本語母語話者である日本人学生の方が日本語能力が優れているという前提にたっているため、学年暦において留学生より早い時機に日本人学生に意見文を書かせたことが留学生との差を縮めることはあっても大きくすることはないと判断した。

タスク：30分という時間制限の中で以下の指示を与え、辞書の使用を許可することなく意見文を書かせた。

「『国際化』という言葉が使われ始めてからずいぶん経つにもかかわらず、日本はまだまだ本当の意味での国際化ができていないとよく言われる。これについてあなたの意見を述べなさい。」

## 2. データの分析

収集したデータについて言語的ならびに修辭的分析を行った。言語的分析は、Wolfe-Quintero他（1998）に紹介されている第二言語による書く能力の測定法（流暢さの測定、正確さの測定、文法的複雑さの測定）に基づき行った。修辭的分析については、データ作文の中でどこに主張文があらわれるかを観察し、文章構造の型に分類した。作文の内容についても、留学生の書いたものと日本人学生の書いたものを比較した結果、その違いが認められたので、本稿第3節で言及する。

### 2.1. 流暢さの測定

英語では作文の長さが語数で測られるのが慣例であるが、日本語の作文を対象とした本調査では語数ではなく字数を数えることにした。日本語では文章の長さを指定する際に語数でなく字数でもって行うのが慣例になっている事実に加え、日本語学の分野では、「語」の概念そのものが議論の対象になっていること（Lee, 1995）もその背景にある。

表1は今回の研究対象となった日本人学生と留学生による作文の字数を数え、その平均値と標準偏差値を計り、両者をt検定した結果を表したものである。

表1：字数による作文の長さ

留学生 (N=58)	平均値	349.64
	標準偏差値	71.04
日本人学生 (N=36)	平均値	438.69
	標準偏差値	132.38

$$t(92) = 3.718, p < 0.01$$

t検定の結果が示すように、同じ1回生として在籍する学生ではあっても日本人学生と留学生との間には統計的に大きな有意差が見られ（ $t(92)$ ）

=3.718,  $p < 0.01$ )、日本人学生の方がはるかに流暢に(速く)文章を書くことが確認された。ただ、表1からも明らかであるように、偏差値については日本人学生の方が大きく、日本人の中では流暢さに関する差異が大きいこと、つまり、速くすらすら書ける学生とそうでない学生との差については留学生よりも大きいことが注目される。

## 2.2. 正確さの測定

正確さについては、Error-free T-unit ratio (EFT/T) T-ユニット総数をエラーの無いT-ユニット数 (Error-free T-unit) で割った数値で測った。T-ユニットとは、Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics によると、“a measure of the linguistic complexity of sentences, defined as the shortest unit which a sentence can be reduced to, and consisting of one independent clause together with whatever dependent clauses are attached to it” のことである。つまり、主節とその従属節で成る単位のことであり、2つ以上の主節でなりたつ coordinate sentence は1つ以上のT-ユニットと数えられる。Error-free T-unit ratio (EFT/T) は、アラビア語母語話者が書いた英語を分析するために Scott and Tucker (1974) が導入した測定方法である。その後、この方法を用いて行われた12の研究の結果でも、Error-free T-unit ratio (EFT/T) と第二言語能力 (proficiency) との間の相関性が明らかにされている (Wolfe-Quintero 他, 1998:44) が、第二言語としての日本語については、先行研究がない。

本調査で対象となった留学生の作文には、(1) ~ (3) の例にあるように、語彙レベルの誤用、文法の誤用、表記の誤用をはじめ、さまざまな誤用が見られたが、日本人学生の作文には語彙レベルの誤用は全くなかった。しかしながら、日本人学生でも(4)のような表記の誤用はあり、また、母語話者は文法の誤用は無いという通説に反し、わずかながらも、

(5) のような文法レベルの誤用も見られた。

留学生の作文より抜粋:

- (1) 日本の本国の管理や、技術など没落するかもしれない。
- (2) 国と国の距離は縮まれで、どんな国に行きたかったら、すぐ行けると思う。
- (3) 日本は自分が先端に技術とユニックな管理方法を持って、他の国の人材を使わなくても十分だと思う。

日本人学生の作文より抜粋：

- (4) 認識しづらい環境であると言えるかもしれない
- (5) 他の国の人や難民の人たちをもっと日本に入りやすくなると思う。

前述の通り、Accuracy ratio (正確さの割合) はError-free T-unit ratio (EFT/T) T-ユニット総数をエラーの無いT-ユニット数 (Error-free T-unit) で割った数値 で計算したが、日本人学生と留学生の作文の各平均値と標準偏差値の比較は以下の表2にあるとおりである。

表2：正確さの測定：エラーの無いT-ユニット数 (EFT) / T-ユニット数

		EFT	T-ユニット	EFT/T-ユニット
留学生 (N=58)	平均値	6.42	10.86	0.58
	標準偏差値	3.03	2.66	0.19
日本人学生 (N=36)	平均値	11.75	12.28	0.95
	標準偏差値	4.46	4.27	0.10

$$t(92) = 12.33, p < 0.01$$

t検定の結果が示すように、正確さの点でも、日本人学生と留学生の間には大きな有意差があることが確認された ( $t(92) = 12.33, p < 0.01$ )。

### 2.3. 文法的複雑さの測定（その1）

文を構成する節、文、T-ユニットの間にはさまざまな種類のGrammatical complexity（文法的複雑さ）の測定法があるが、その中でも、T-ユニットの数を節の数で割って出すT-unit complex ratioという数値がこれまでの研究で最も頻繁に用いられたもので、Wolfe-Quinteroには17件の研究が紹介されている。したがって、本研究でもこの測定法を用いることにした。「T-ユニット」が「節」と異なることは以下の例で示した。/で示したのが「節」の区切れであり、[ ]がT-ユニットの区切れである。つまり、以下の一つの文は5つの節で成り立っているが、T-ユニットの数で言えば2つであると数える。

（6）[このように「国際化」が進む中で/、日本は本当の意味での国際化ができていないと言われるが/、][では、本当の意味での国際化とは、一体どういうことな/のであろうか/]

表3は、日本人学生と留学生の作文に現れる節の数とT-ユニットの数を数え、前者を後者で割ることによって測った文法的複雑さの比較を示したものである。

ここでもまた、日本人学生の方が留学生より複雑な文を書くということが統計的にも大きな有意差になって現れているのが確認された。（ $t(92) = 3.845, p < 0.01$ ）

表3 文法的複雑さ（1）：節 / T-ユニット

		節	T-ユニット	節/T-ユニット
留学生 (N=58)	平均値	25.11	10.86	2.37
	標準偏差	5.50	2.66	0.57
日本人学生 (N=36)	平均	34.14	12.28	2.83
	標準偏差	12.15	4.27	0.56

$$t(92) = 3.845, p < 0.01$$

## 2.4. 文法的複雑さの測定（その2）

文法的複雑さ（その1）で用いたT-unit complex ratio（節 / T-ユニット）は、動詞の有無によって規定される「節」に焦点をあてたものであった。そこで、よりバランスの取れた分析を行うためにも、動詞でなく名詞に焦点をあてた測定法をも用いることにした。

Cooper（1976）は第二言語としてのドイツ語を測るために、T-ユニットに含まれるcomplex nominalの割合を調べた。彼はこの測定法の結果と、ドイツ語を第二言語とする学生の学年別作文能力との間で相関関係があることを明らかにした。つまり、この測定法で得られたスコアはドイツ語母語話者の得点が高くと高く、それに続く非母語話者については、学年が上がるにつれ高くなっているということを示したのである。彼はこの能力を「節を長くすることによって、文やTユニットの中に含む情報量を多くさせる作文能力」に起因するとした。

ところが、本研究では日本語を対象としているため、Cooperが用いたcomplex nominalの分類をそのまま適用することができず、ある程度の修正を加えた。たとえば、Cooperがcomplex nominalとしてその頻度を数えたgerundやinfinitiveという構文は日本語に存在しない。そこで、本研究ではgerundやinfinitiveに相当するもの、具体的には、補文構造にあらわれ、「...こと」、「...の」、「ところ」、「...よう（に）」という補文標識でその存在が示される名詞節を対象とした。また、Cooperが対象とした形容詞で修飾されるheaded nominalについては、今回のデータからは除外した。たとえば、「大きい家」などのような名詞句は日本語の教科書に早くから導入されており、文法的な複雑さを測るものとしては適当でない判断したからである。結果、ここでは関係節に修飾される名詞（日本語学では「連体節」と称されるもの）と、「...こと」「...の」「ところ」「...よう」といった補文標識で名詞化される名詞節のみを対象としている。以下はその実際例である。

関係節[ ]に修飾される名詞から成る連体節

(7) [今成功をつかむ]者は皆そうだと思う。

補文標識「こと」で名詞化される名詞節

(8) [最近よく聞こえた]ことは国際化である。

この二種類が現れる数を数え、T-ユニット総数で割ったものが以下の通りである。

表4 連体節・名詞節 / T-ユニット

		連体節・名詞節	T-ユニット	連体節・名詞節 / T-ユニット
留学生 (N=58)	平均値	3.92	10.86	0.37
	標準偏差値	3.25	2.66	0.30
日本人学生 (N=36)	平均値	8.94	12.28	0.74
	標準偏差値	4.39	4.27	0.34

$$t(92) = 5.361, p < 0.01$$

日本人学生と留学生の違いはここでも大きな有意差となっている ( $t(92) = 5.361, p < 0.01$ )。特に、表4の中に太字で示したように、留学生の方が日本人学生よりはるかに少ない割合で連体節と名詞節を用いていることには注目すべきである。

## 2.5 文章構造：主張文のあらわれる位置

文章や段落全体の内容をまとめる表現の働きは「統括機能」とよばれる(市川1978, 永野1986)。佐久間(1990)は統括機能の位置による文章表現の類型を(A)統括式、(B)尾括式、(C)両括式、(D)中括式、(E)隠括式、に分け、この5種類を基本的な構造類型としている。そして、文章の種類の中でも特に意見文に焦点をあてた木戸(1992)は、この5



種類を発展させた形で「散括型」を加え、以下の類型を提示している。

(文章構造の型) (はじめ - なか - おわり)

1. 頭括型 [主張] - [ ] - [ ]
2. 中括型 [ ] - [主張] - [ ]
3. 尾括型 [ ] - [ ] - [主張]
4. 双括型 [主張] - [ ] - [主張]
5. 散括型 [主張] - [主張] - [主張]
6. 無括型 [ ] - [ ] - [ ]

本研究では、収集したデータがやはり意見文であるということから、上記の木戸の分類に従うことにした。その結果は以下の表の通りである。なお、ここでは未完の作文は分類の対象となっていない。

表5 文章構造の型による作文数

	留学生	日本人学生
双括型	19	18
尾括型	12	7
頭括型	6	0
散括型	3	2
中括型	1	0
無括型	1	1
中尾型	7	1

上の表5からわかるように、日本人学生、留学生双方のグループにおいて最も多くの学生に見られたのは、作文のはじめの方にまず課題として与えられた意見に対する賛否を述べ、それから自分の意見をサポートすべくその根拠、理由、例等を挙げ、最後にそのまとめをするという双括型であった。これについては、まず一般的な世間の意見を与えて、それから各自の意見を尋ねるといった今回のデータ収集法が影響を与えてい

るという可能性も考えられる。その原因についての詳しい研究は将来の課題であるが、本研究に関する限り、主張文の位置については、日本人学生と留学生の間で大きな違いがみられるとは言い難い。

しかしながら、7名の留学生の作文に現れているのに対して、日本人では1名の作文にしか現れなかった文章構造の型が見つかったことについては注目すべきであろう。これは、木戸（1992）の分類にも無いもので、いわば「中尾型」（文章のなかとおわりに主張が表れるもの）と呼ぶべきものである。

### 3. 作文の内容

言語、構成とともに「内容」は作文を構成する主要素である。今回、データ収集のために課した指示文にあった一般的な世間の意見、つまり「日本は真の意味での国際化がなされていない」という意見に直ちに自分の賛否の意を表明した者、明確な立場の表明なしに賛成の立場を支持する理由のみを述べた者、与えられた質問を無視して別の議論を始めた者など、さまざまな反応を示した作文が回収された。表6は、そのようなさまざまな反応を分類したものである。ちなみに、データ収集時の指示文を再度、以下に記しておく。

「『国際化』という言葉が使われ始めてからずいぶん経つにもかかわらず、日本はまだまだ本当の意味での国際化ができていないとよく言われる。これについてあなたの意見を述べなさい。」

表 6 意見の内容別による作文数

	留学生 (N = 58)	日本人学生 (N = 36)
賛成の表明	31 (53%)	13 (36%)
賛成の理由のみ	0 (0%)	8 (22%)
反対の表明	12 (21%)	4 (11%)
賛否両論	6 (10%)	5 (14%)
別の関連した意見	7 (12%)	6 (17%)
賛否の一貫性に欠けるもの	2 (3%)	0 (0%)

表 6 にあるように、日本人学生、留学生ともに、半数以上の学生が課題テーマとしてあげられた一般的な世間の意見、つまり「日本は真の意味での国際化がなされていない」という意見に賛成した。しかしながら、賛成の理由として提示された内容には二者の間で大きな違いが見られた。日本人学生の中で最もよく見られた理由としては、日本人が英語が話せないということであったのに対して、留学生が最もよく挙げた理由は外国人が日本社会に受け入れられていないということであった。以下、その違いがよく現れている作文を紹介しておく。

### 日本人の作文例

(9) 僕が考える国際化というのは、違った国同士の人々が何のへだたりもなく会話をし、文化を知っている状態だと思います。そういった点で現在の日本人は国際化とは、ほど遠い状況にあると考えます。日本の英語の教育のレベルは、相当低いと聞いたことがあります。世界で一番使用されている英語ですら、このような状況なのです。日本語を話すことができればそれでいいという考えを持つ日本人が現在、多いみたいです。口では「他国の言語を知ろう」などと、きれいごとを言っているが、それを行動にうつして

いる人はほんの一握りなのが現状です。

しかし、他国の文化を受け入れるという点は進んでいると思います。町を歩いていると、イタリアン料理、中華料理などをよく見かけます。これは他国の文化を日本人が受け入れている証明だと思えます。

結局、今の日本人は苦勞してまで他国の言語を修得しようとしていないのです。そういった点で日本の国際化は遅れているのだと考えます。

#### 留学生の作文例

- (10) たしかに日本は国際化ができているとはいえない。現在の日本は国際化になるため、いろいろな政策がだされている。日本政府はたくさんの留学生を受け、毎年増加しているのだ。外国人に対して、日本にくるのは昔とくらべて、たしかにしやすくなる。だが、それだけで日本は国際化になるとは言えないと思う。なぜならば、日本はたくさんの外国人を受け入れる時、同時に外国人が日本で活動する政策がすくないからである。

まだ、外国人は日本で活動することに対して、まだたくさんの制限がある。たとえば、外国人は日本で会社を成ちあげたい場合は、普通の日本人よりいろいろ制限がある。日本に長くに住んでも、日本の国籍をもらえない。外国人も選挙権がない。それと国際化になたアメリカと大きくちがっている。

以上のように、日本は国際化ができているとはいえないだろう。

#### 4 . むすび

本稿では、留学生の書く意見文と日本人学生が書く意見文の間には、

流暢さ（書く速さ）、正確さ、複雑さのすべての面において有意差があることが確認された。中でも、T-ユニットに現れる連体節・名詞節の割合によって測る文法的複雑さには両者の間で顕著な違いが見られた。連体節・名詞節は一文の中により多くの情報をつめこむ働きをすることが指摘されているが、これはまた、通常、旧情報から新情報へと流れる文やディスコースの中でも大切な働きをしている（Mauranen, 1996; Weissberg, 1984）。つまり、前の文に出てきた情報を連体節や名詞節の中に取り入れることにより、それが今度は旧情報を表す主語となり、その結果、その述部にはまた新情報を導入できるわけである。以下はその方法を用いている日本人学生の作文例である。

- (11) 日本が本当の意味での国際化ができていないことについて、私はいろいろな面においての外国人との姿勢の差にあるように考えます。私が考える姿勢の差というのは、旅行に行く時、勉強などに行く時などさまざまな場面での外国人と日本人のその行動に対することです。

本研究では、主張文の現れる位置についても分析したが、この点については日本人学生と留学生との間でさほど違いは見られなかった。両者とも文章のはじめの方と最後の方に主張文を置く双括型の文章構造が最も多かった。しかしながら、これについては、今回のデータ収集法が影響を与えているという可能性があることを既に指摘した。これに関する詳しい研究も将来の課題である。

## 参考文献

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」 『表現研究』 第55号、9-19.
- 佐久間まゆみ (1990) 「ケース 8 文章の構造類型」 寺村秀夫他編 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』 桜楓社
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉出版
- Lee 凧子 (1995) 『日本語の補文構造 Lexicase 文法理論による分析』 くろしお出版
- Cooper, T. C. (1976). Measuring written syntactic patterns of second language learners of German. *The Journal of Educational Research*, 69, 176-183.
- Mauranen, A. (1996). Discourse competence-evidence from thematic development in native and non-native texts. In E. Vantola & A. Mauranen (Eds.), *Academic writing: Intercultural and textual issues*, 195-230. Amsterdam: John Benjamins.
- Scott, M.S., & Tucker, G.R. (1974) Error analysis and English-language strategies of Arab students. *Language Learning*, 24, 69-97.
- Weissberg, R. (1984) Given and new: Paragraph development models from scientific English. *TESOL Quarterly*, 18 (3), 485-500.
- Wolfe-Quintero, K., Inagaki, S., & Kim, H-Y. (1998) *Second Language Development in Writing: Measures of fluency, accuracy, & complexity*. Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i.